

群 教 セ	F09 - 01
	平 16.218集

不登校を予防する 教師と保護者のシステム作り

－ 子育て支援プログラムの活用を通して －

長期研修員 國峯 智
指導主事 武藤 榮一

《研究の概要》

本研究は、不登校問題解決のために提案された「子育て支援プログラム」に関する継続研究である。不登校予防のための家庭の教育力の向上をねらった子育て支援プログラムを作成し、実践した。その結果、プログラム作りを容易にする手立てが必要という課題が明らかになった。そして、気軽にプログラム作りに取り組めるための手引きを作成した。又、継続的にセミナーを実施することで家庭の教育力が高まることがわかった。

【キーワード：教育相談 不登校予防 問題解決能力 子育て支援 ロールプレイング 相互コミュニケーション】

研究の基本的な考え方

生徒指導主任を経験して感じたことは、不登校などの問題行動が起こるのを防ぐ手立てを考えることが必要だということである。つまり、子どもの心を安定させ、問題行動を予防する、積極的な生徒指導が必要に迫られていると感じた。

群馬県内では、不登校児童生徒の増加や長期化など不登校の状況を踏まえ、各学校及び適応指導教室等において、不登校児童生徒の学校復帰及び社会的自立を目指した継続的な対応が行われている(群馬県総合教育センター 2004)。そのような対応の結果、昨年度は、不登校児童生徒数はやや減少してきた。しかし、依然として深刻な状況にある不登校問題の解決に向けて、今後も継続的な対応を引き続き行っていくことが重要と考える。

したがって、不登校児童生徒数を減少させる対策と共に、不登校を出さないための取組も積極的に行っていくべきである。生徒指導資料資料第2集「不登校への対応と学校の取組」の中では、「不登校への対応の基本的な考え方」として、「保護者の役割と家庭への支援 - 家庭の教育力の充実 - 」をすべきと提言されている。保護者全般に対し不登校への理解を深めるための啓発活動に取り組んだり、子育てに関する悩みや不安をもつ保護者に対し学習の機会を提供したりすることなども考えられる、と述べられている(国立教育政策研究所生徒指導研究センター2004)。今、その方針に沿った具体的な方策を提案していく必要があると考える。

ところで、平成13年度に実施された「家庭教育に関する調査結果」を分析した結果、保護者と子どもとの間に意識のずれがあることが見えてきた。保護者は、子どもに家庭ではできない体験をさせて、理想的な子育てをしたいと考えている。一方、子どもは家族とのかかわりを通して心の絆を深めたいと考え、様々なメッセージを発していることがわかった(総合教育センター家庭教育に関する調査チーム 2002)。

このような実態を踏まえ、総合教育センターは家庭の教育力を高めるための方策として、子育て支援セミナーを企画し、昨年度は県内の幼稚園一園、小学校一校、中学校一校で実践し、効果を得た。そこで、子育て支援プログラムを、教師が誰でも気軽に実践できる工夫をするこ

とが、群馬県の教育課題である「不登校問題解決」のための一つの手段と考えた。

本研究では、子育て支援プログラムの作成や実践上の課題を明らかにし、全ての教師が子育て支援プログラムを活用しやすいような提案をしていきたいと考える。

研究の問いと研究の手順

本研究における研究者の問いは、以下の通りである。

教師が子育て支援セミナーを気軽に実施するにはどうしたらいいか。

本研究は、フィールドワークを通じた研究により不登校予防モデルを構築したいと考え、「モデル構成的質的研究の手順」(奥山・懸川 2004)を参考にして行った。

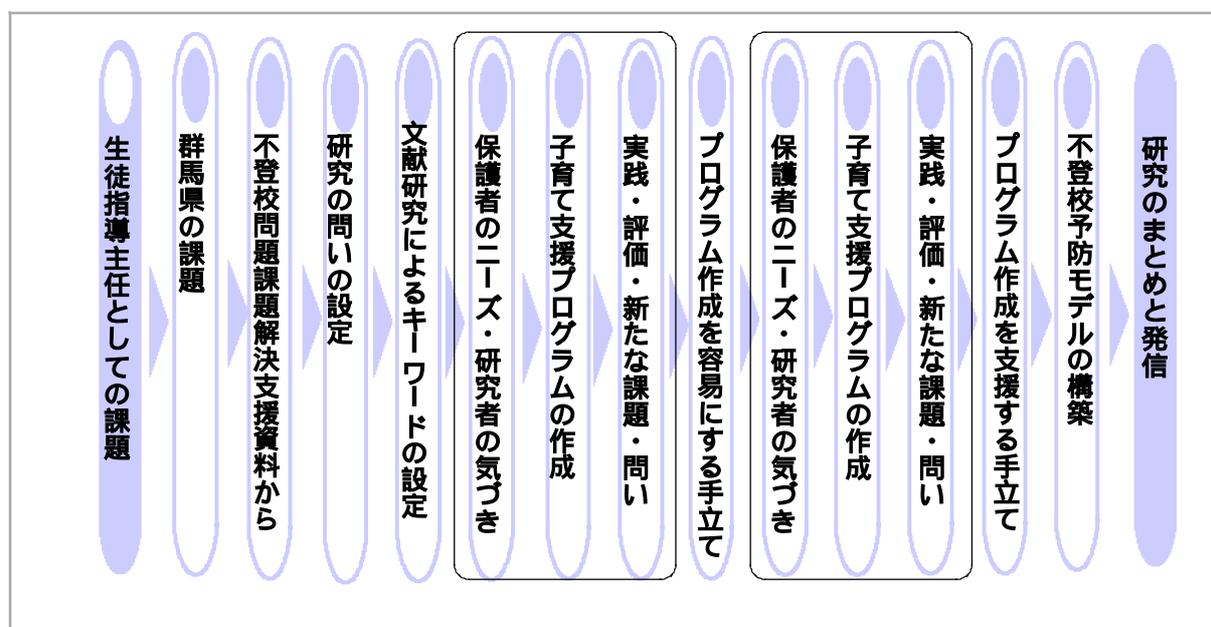


図1 モデルプログラム作成の過程

子育て支援プログラムと研究のキーワード

1 不登校対策支援総合推進事業の重点事業

群馬県総合教育センター教育相談Gでは、平成13年度に家庭教育にかかわる保護者と子どもの意識について、県内の幼稚園・小学校・中学校の保護者3,003名、小学校4年生から中学校3年生2,482名にアンケート調査を実施し、「家庭教育に関する調査結果」としてまとめた。

調査結果から、孤軍奮闘する子育てに熱心な母親像と、一方では、家庭の教育について理想を高く持ち、冷静に理解している母親像が見えてきた。子どもは、物質的なものを求めているのではなく、家族とのかかわりを通して、絆を深めること、保護者が知識としてもっているものを実践に移すこと、そして、その実践の中で、子どもがぬくもりを感じられることを求めていることが分かった。

調査結果を受けて、平成14、15年度に、園や学校の教師が、保護者と子どもとのかかわりについて共に考える機会として、保護者参加型の子育て支援セミナーを企画し、県内の幼稚園、

小・中学校の協力校で展開してきた。

子育て支援セミナーの大まかな流れは、以下の通りである。

セミナーの企画者の流れは、

事前アンケートやその他の情報収集から保護者の子育ての願いを把握する。

保護者の願いに添ったテーマを設定する。

テーマのかかわる必要な知識や技術を学ぶ。

設定したテーマに基づいてプログラムを作成する。

セミナーを実践し、保護者と共に学び合いながら、信頼関係を築く。

子どもとのかかわり方について学んだことが、その後どう生かされているについて事後アンケートを実施する。その成果と課題を次回のセミナーに生かしていく。

保護者の流れは、

子育て支援セミナーに参加し、共有課題を解決する話し合いを通して他の保護者の考えや実践に学ぶ。

学んだことを生かして、子どもとのかかわり方のプランを立てる。

家庭にもどり、プランを生かして子どもとのかかわる。

その後の子どもとのかかわりについて、事後アンケートにより自己評価する。

このような子育て支援セミナーを通して、家庭の子育てを支援することが、不登校問題の課題解決の基礎となるととらえ、不登校対策の予防的取組として不登校対策支援総合推進事業の重点事業に位置づけた。(群馬県総合教育センター 2004)

2 実践に入る前のキーワード

親子の相互コミュニケーション

子どもの発達課題と保護者の願い

教師と保護者の信頼関係

子育て支援プログラムの作成・実践・評価・新たな問い

1 保護者の願いの把握

置籍校の4学年合同懇談会に向けて、保護者の願いを把握するためのアンケートを作成し、保護者に配布して解答してもらった。

以下が、回収できたアンケート結果である。アンケートの内容から大事だと思うキーワードに、下線をつけた。(一部抜粋、全文は実践編参照)

資料1 アンケート結果A

性教育(生理の事など、どう話していったら)

反抗期の子どもとのかかわり方...どこまで親としてかかわればよいか。

4年生というこの年令は心も体も大きく変化する時期ですが、親の方も"もう10歳"

4年生になりだいが大人びた言動が見られるようになりましたが、まだまだ幼いところも残っているようです。少しずつ自分の力で考えて行動できるようになってきていますが、どんなふうに見守ってやったらよいでしょうか。

次に、アンケート内容を整理し、保護者の願いの傾向を分析するために、キーワードを仲間

分けしてみた。そして、仲間分けしたキーワードをまとめる言葉（概念）を考えた。

このような思考過程を経て、セミナーのテーマを「前思春期の我が子の自主性の持たせ方」に設定した。（詳しくは、実践編参照）

2 プログラム作り

設定したテーマに基づいて、セミナーのプログラムを作成した。まず、テーマに関する文献等を参考にして、ポイントを明らかにした。次に、保護者が、より楽しみながら参加できるようにエクササイズを選んだ。

以下は、このような手順で作った実際のプログラムである。（詳しくは、プログラム編参照）

資料2 プログラムA

ねらい	分	活 動（ 教師 保護者 ）
オリエンテーション ・セミナーのねらいを確認する。	5	これまでの子育てを認め、安心した気持ちでセミナーに参加できるようにする。
ウォーミングアップ	15	自己紹介 表情読み取りゲーム
ワーク「こんな時どうする？」 ・子どもの行動や表情から子どもの内面を察知する目を養う。	30	実習1 題名「帰宅した子どもとお母さん」 課題場面をロールプレイで示す。 課題解決に向けて四人組で話し合う。 話し合った内容を全体で振り返る。 実習2 題名「夕食後のヒロシ君」 課題場面をロールプレイで示す。 課題解決に向けて四人組で話し合う。 話し合った内容を全体で振り返る。
家庭教育リーフレットの活用 ・自分の子育てを振り返る。	5	家庭用リーフレットを活用しながら、セミナーのまとめをする。 振り返り用紙に、評価や感想を記入する。

3 実践から得た学びと新たな問い

(1) 子育て支援セミナーは、保護者と教師が子どものかかわりについて共に考えるよい機会であることが、参加者の感想から証明できた。しかし、PRの仕方を工夫したり、参加者の人間関係を配慮してグループ分けをしたりするなど、実施するに当たって留意すべき点に気づくことができた。

(2) 保護者は、自分の思いを伝えたり人の意見を聞いたりする機会を作り、情報交換したいと望んでいることがわかった。したがって、子育て支援セミナーは、そのような保護者のニーズに応え、プログラム次第で問題解決能力を向上させるのに大いに役立つと考える。

(3) 研究者は、子育て支援セミナーのプログラム作りを通して、問題解決能力が高まること

資料3 ロールプレイ場面



が実感できた。担任が主となって実施する場合、保護者の願いに添って支援することが大事になってくることがわかった。

(4) プログラムを作成する上で一番難かしかったのは、保護者の願いからテーマを導く作業である。特に、その思考過程を学ぶことができる手立てを提案することが必要であると感じた。

以上(1)から(4)の学びから、子育て支援セミナーの実践の結果から、教師が気軽にプログラムを作成してセミナーを実施するためには、プログラム作りに役立つ手立てが必要であると感じた。そこで以下のような、新たな問いが生まれた。

新たな問い 子育て支援プログラム作りに役立つ手引きをどのように作成したらいいか。

子育て支援プログラム作成の手引き

1 保護者の願いと子どもの発達課題

研究者がプログラム作りで一番苦労したのは、保護者の願いを集約して、テーマに結びつける作業である。

そのことを踏まえ、保護者に対するアンケートから出てきた「願いや悩み・不安」を、「子どもに身につけさせたい力」(子どもの発達課題)に結びつけることができる、資料1のようなチェックシートを作成することを、最初に試みた(詳しくは、手引き編参照)。



図2 テーマを導くチェックシート(一部抜粋)

2 プログラム作りの手引き

次に、手引きを読み進めることで「アンケートの取り方」から「プログラムの実践」という一連の思考過程を学ぶことができるよう工夫した。そして、手引きを、以下の構成で作成し、完成させた。図3は、「子育て支援セミナープログラム作りの流れ」である。(詳細は、手引き編参照)。

子育て支援セミナープログラム作りの流れ

アンケート用紙の作り方

事前アンケートの例

子どもの発達段階に応じたテーマ設定の仕方

「アンケート結果」から「セミナーのテーマ」を導くチェックシート

テーマ設定の仕方の例

子育てのポイントの設定の仕方

「セミナーのテーマ」から「テーマにかかわる子育てのポイント」を導くチェックシート

テーマに迫るためのロールプレイの例

セミナー受講後の保護者の感想

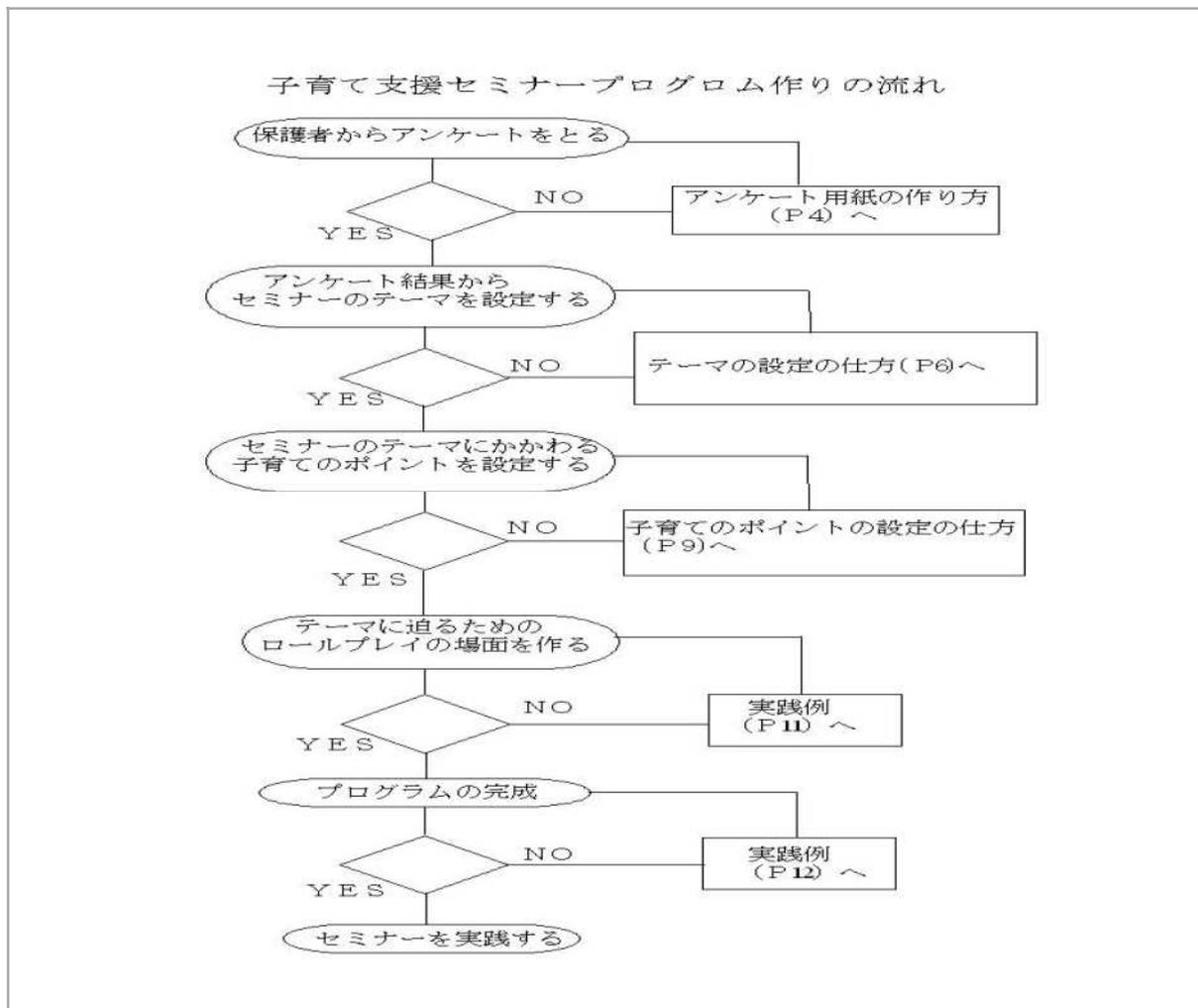


図3 手引きの流れ

子育て支援プログラムの作成・実践・評価・新たな問い

1 保護者の願いの把握

置籍校での2回目の実践（全学年保護者を対象としたPTAセミナー）に向けて、事前アンケートを実施した結果、以下の保護者の願いを把握することができた。

資料4 アンケートB

子供たちの言葉の悪さについて
 子どもとのコミュニケーションについて
 子どものしかり方とほめ方
 父親が夕方からの仕事で休みの為、子供とのコミュニケーションがあまり取れていません。今はそういうものだとして理解しているようですが、今後、どのような影響が出るかと心配しています。

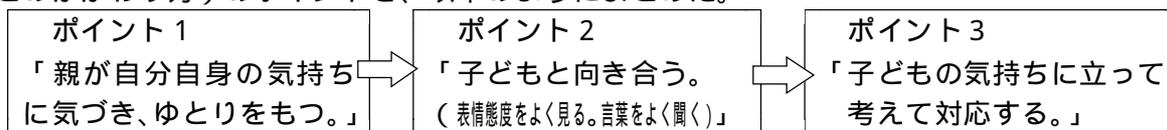
作成した手引きに沿って、アンケート結果をもとにプログラムを作成することを試みた。しかしながら、アンケートの内容が、『「アンケート結果」から「セミナーのテーマ」を導く手

エックシート』の項目に当てはまらなかったため、手引きを活用してテーマを導くことができなかった。

アンケートの内容から、「コミュニケーション」というキーワードが浮かび上がったので、保護者は子どもとのコミュニケーションの基本を学びたいという願いを持っているのではないかと考え、テーマを「我が子とのコミュニケーションのとり方」とした。

2 プログラム作り

キーワードの「コミュニケーション」について文献等で学び、コミュニケーション（子どもとのかかわり方）のポイントを、以下のようにまとめた。



以下はプログラムの大まかな展開である。(詳しくは、プログラム編参照)

資料5 プログラムB

ね ら い	分	活 動 (教 師 保 護 者)
オリエンテーション ・セミナーのテーマについて確認する。	10	研修会のテーマを説明する。
ウォーミングアップ ・緊張をほぐす。	15	グループ分けゲーム(バースデーラインの応用) 自己紹介(自分の気持ち表現しよう)
実習1 ・ポイント1に関する実習	15	自分の気持ちへの注目度チェック
実習2 ・ロールプレイによって課題を外在化する。 ・ポイント2の確認。	15	夫が自分の気持ちをわかってくれなかったのはどうしてか? 課題場面をロールプレイで示す。 課題解決に向けて四人組で話し合う。 ロールプレイを見て感じたことを全体で発表する。
実習3 ・ポイント3に関する実習 ・ロールプレイによって課題を外在化する。	25	もし、自分の子どもから『お母さん、私、みんなから嫌われているのかな?』と言われたらどう応えますか? 課題場面をロールプレイで示す。 ロールプレイを見て感じたことを全体で発表する。 子どもの気持ちを考え、どう声をかけるか考える。 「こんな話が出ました」と全体で報告。
家庭教育リーフレットの活用 ・今後の我が子とのかかわり方を考える。	10	家庭用リーフレットを活用しながら、セミナーのまとめをする。 振り返り用紙に感想等を記入してもらおうよう話す。 振り返り用紙に、評価や感想を記入する。

3 実践から得た学びと新たな問い

(1) プログラム作り役に立つ手引きを作成したが、手引きを活用してテーマを導くことができなかった。保護者の願いによっては、発達課題を考慮してテーマを絞り込むのではなく、

どの年齢層の子どもにもかかわるような、より広い概念でテーマを設定する必要があることがわかった。学級懇談会では、一つの学年の子どもの子育てについて考えればよいが、PTAセミナーでは、対象になる子どもが、複数になることが考えられる。保護者にとっては自分の子どもにかかわるテーマで学びたいと考えるのは、当然のことであり、柔軟に対応できるプログラムが必要である。

(2) 保護者は、子どもの気持ちを理解しようとして、「どうして?」と子どもに質問することが多いことがわかった。子どもの立場に立って、「親が自分の気持ちをわかってくれた」と思えるような対応(言葉かけ)をすることができていないことがわかった。

以上(1)(2)の学びから、発達課題を踏まえて作成したプログラム作りの手引きは、より焦点化されたテーマを導くには役立つが、広い概念でテーマを設定する場合には、他の手立てが必要であると感じた。そこで以下のような、新たな問いが生まれた。

新たな問い 手引きが活用しづらい場合、プログラム作成をどう支援したらよいか。

子育て支援プログラムの具体例の作成

1 子どもとの共感的なかかわり方を学ぶプログラムの作成

手引きを修正するのではなく、手引きを補うことを考え、置籍校での2回目の子育て支援プログラムを基に、教師が気軽に活用できるプログラムを作成した。保護者の実態を踏まえ、「子どもとのコミュニケーションのとり方」というテーマとした。全ての発達段階を縦断して取り入れることのできるテーマである。どのような保護者の願いも包括したテーマであり、応用範囲が広いと言える。

以下は、プログラムの大まかな流れである。(詳細は、プログラム編参照)

資料6 プログラムC

ねらい	分	活動(教師 保護者)
開会		
オリエンテーション ・セミナーのテーマについて確認する。	5	スタッフが自己紹介をする。 研修会のテーマを説明する。
ウォーミングアップ ・緊張をほぐす。	15	グループ分けゲーム(パースデーラインの応用) 自己紹介(自分の気持ちを表現しましょう)
実習 ・ロールプレイによって課題を外在化	30	もし、自分の子どもから『お母さん、私、みんなから嫌われているのかな?』と言われたら? 課題場面を教師がロールプレイで示す。 ロールプレイを見て感じたことを全体で発表する。 子どもの気持ちを考え、どう声をかけるか考える。
振り返り	10	子どもとのかかわり方のプランを立てる

作成した上記のプログラムを活用して、保護者や学校のニーズに応じて修正を加え、県内2校の小学校のPTAセミナーで実践した。両校でのセミナーの実践で共通することは、保護者が「子どもの気持ちをわかってあげたい」という気持ちが高まったことである。子どもが「自分の気持ちをわかってくれた」と思えるような具体的な言葉かけを保護者が学び、子育てに生

かしていこうとする意欲が高まった。

したがって、共感的なかわり方を学び、親子の相互コミュニケーションが成立することをねらいとして作成したプログラムは、有効に機能したと言える。

2 ワークシート形式の手引き

「プログラム作成の手引き」とは別に、校内研修や自己研修で使えるような、Q & A形式のワークシートを作成した。ワークシートの流れに沿ってワークを進めると、プログラムが作成できるようにした。ワークを進めることによって、問題解決の一連の思考過程を体験できるようにした。

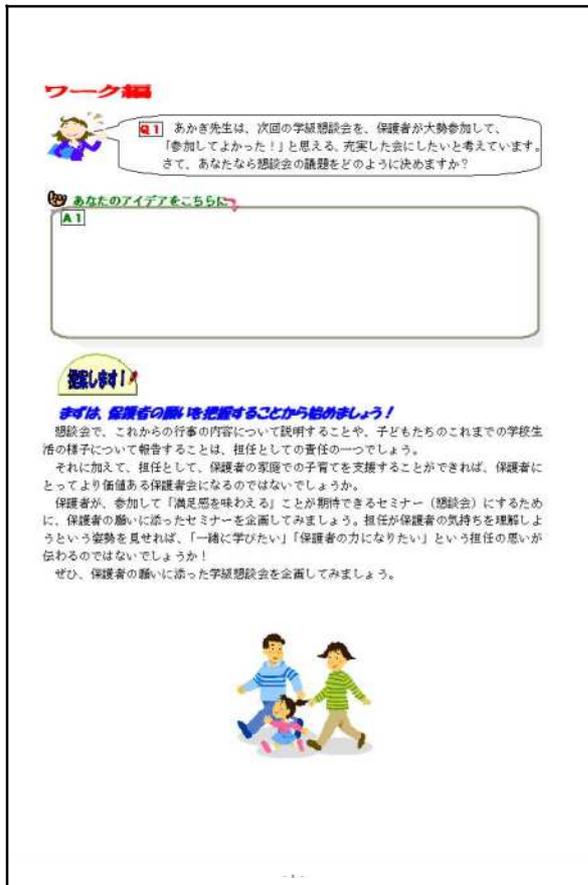


図4 ワーク編の1ページ目

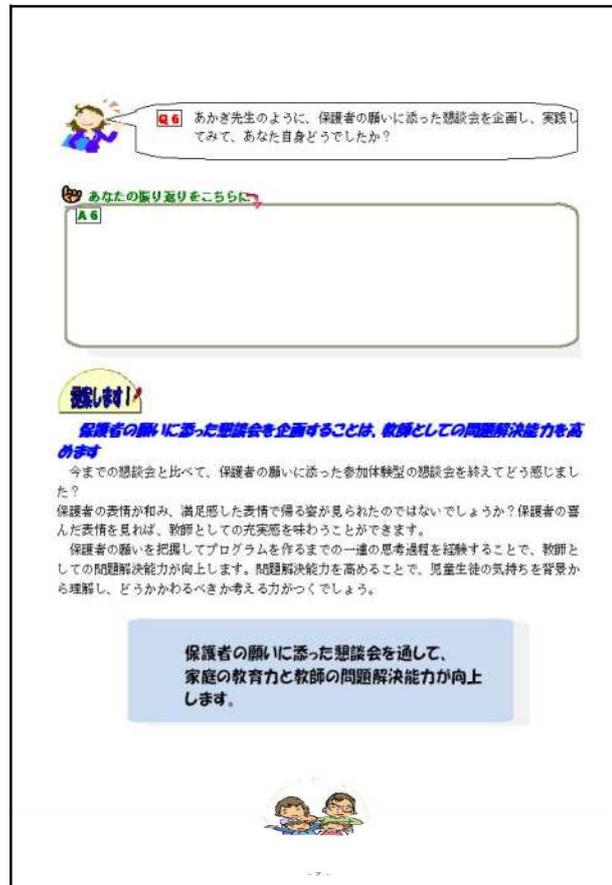


図5 ワーク編の最終ページ

子育て支援セミナーにおける学び

1 教師の問題解決能力の向上

(1) 子どもを背景から理解する

実践した子育て支援セミナーでは、保護者のこれまでの子どもとのかかわり方を、背景から理解しようとした。例えば、子どもが幼かった頃の写真や幼かった頃に使っていたおもちゃを見て、子どもとのかかわり方を振り返ってもらうのである。

学校現場でも、問題行動として現れている事象だけに目を向けて対応するのではなく、子どもを理解する時に、家族関係・親の養育態度・家庭の経済状態・生活習慣・子どもの気持ちなど、子どもが背負っている背景から理解することが必要であると考え、目の前にいる子ども

から何を学べるかが、大きなポイントである。子どもを背景から理解することが、子どもに対する適切な支援方針を決めるスタートと考える。

(2) P T A セミナーの企画を通して、課題解決思考が向上する

セミナーでは、保護者の子育て上の願いに添ってプログラムを作成した。適切な保護者理解に基づいてプログラムを作成し、実践し、評価する一連の思考過程は、課題解決思考である。これらを体験することにより、教師の問題解決能力が向上すると考える。

2 親子の相互コミュニケーション

(1) 子どもの立場に立った対応

子どもが出しているサインをキャッチして、子どもの立場に立って対応することで、子どもは「わかってくれた」と感じる。そこに親子の間の相互コミュニケーションが成立する。しかし、実際どう対応したらよいか、どう言葉をかけたらよいか、大きな課題である。

例えば、子どもの気持ちを理解しようとして、「どうしてそう思うの？」などと声をかけることはできる。子どもは、「わかってくれようとしてくれている。」と思う場合もあるが、「はぐらかされた」と感じることもある。子どもが「わかってくれた」と思える対応として、「そんな時って、こんな気持ちだよ」などの、共感的な対応が大切である。

親と子の相互コミュニケーションには、そのような共感的なかわりが重要なポイントであると考えられる。

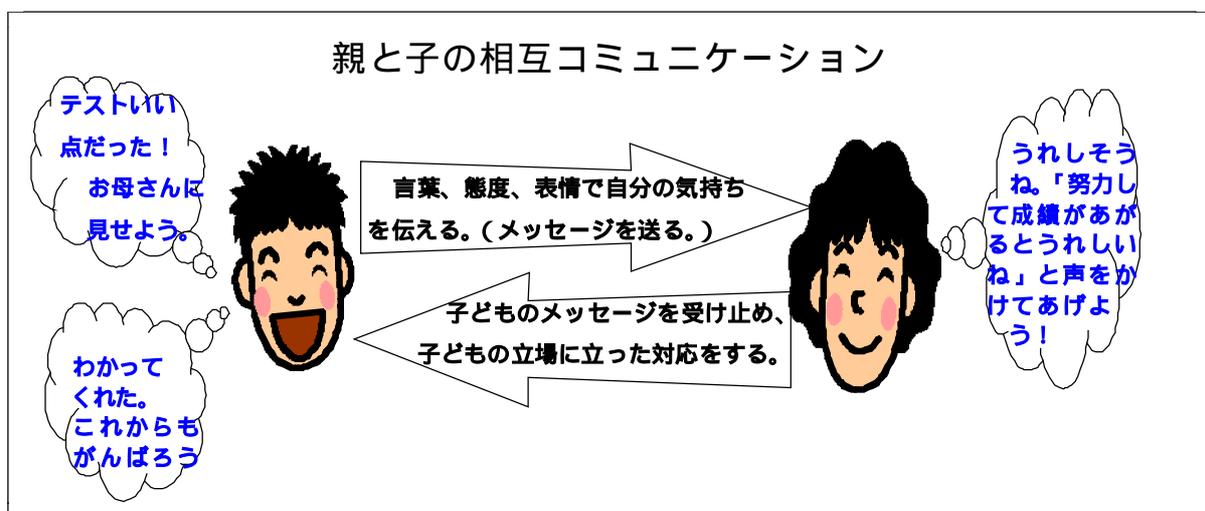


図6 親子の相互コミュニケーションのイメージ

(2) 家庭の教育力のレベルアップ

教育相談グループが、館林十小で3回の実践(ステップアップ研修)した結果から、複数回のセミナー実践により、家庭の教育力が徐々にレベルアップすることを学んだ。

1回目のセミナーでは、ロールプレイでの課題場面提示を通して、子どもとのかかわり方を振り返った。また、保護者自身が、子どもの役を演じることは、子どもの気持ちを理解することにつながった。このような体験を通して、これまでの子どもとのかかわり方に気づくことができた。

2回目のセミナーでは、保護者の願いの変化に対応して、自分自身の抱える課題ごとに意見交換を行う場を設定した。ブレインストーミングの手法を活用し、具体的な解決策を導くため

の話し合いを持った。人の意見を聞くことを通して、課題解決的な思考を学んだ。

3回目のセミナーでは、親子参加の形式で、かかわり方を実際に体験しながら学べる場を設定した。親子はかかわることでお互いを理解し合えることを学び、相互コミュニケーションの大切さに気づいた。

(2) 実習を通したコミュニケーション

館林十小での3回目のセミナーは、「天使のねん土（紙粘土）」を使った作業を行った。「天使のねん土」を使って、親子協働のねん土作りを通して、かかわり方を言葉で説明しなくても、気づくことができた。親は、かかわり方を学び、子どもも、親と話し合うことの心地よさや親の気持ちに気づくことができた。

「天使のねん土」の良さには、いやしの効果もあった。又、作業した経過が、形となって表現できるため、より充実感が実感できた。もともと制作活動は、親にとっても子どもにとっても楽しい活動である。

この「天使のねん土」を活用した親子参加のセミナーを通して、親も子どもも、実際場面でどうコミュニケーションすればよいか体験できた。



図7 親子参加型子育て支援セミナー

子育て支援プログラムを通した不登校予防モデルの構築

1 教師が子育て支援セミナーを企画する

家庭の教育力の低下を危惧し、子育てセミナーが各地で開催されている。そのほとんどが、心療内科の医師やカウンセラー等を講師に迎え、学校外部の団体が、学校外で行っている。

学校やPTAが主催し、会場が学校で行われる場合でも、外部講師を招いて行われる場合がほとんどであろう。つまり、企画段階だけでなく、教師が主となって開催する子育てセミナー

は、少ないと言えよう。

研究者が提案する「子育て支援セミナー」は、「教師が企画することに意義がある」と考える。なぜならば、教師の企画する子育て支援セミナーは、教師と保護者が、共有課題を解決しようとする過程を通して、両者の信頼関係を築かれるとともに、教師の指導力の向上につながる。学校外部の団体が実施する子育てセミナーでは、そのような機能を持たせることは難しい。

2 年間を通して継続したセミナーを企画する

教師が子育て支援セミナーを企画するに当たっては、既存の行事を活用し、ねらいを見直して実施することが現実的であろう。

例をあげれば、学級懇談会、学年懇談会、そして学年行事の見直しが考えられる。それぞれがつながりのある「保護者に対する子育て支援の場」と位置づけ、年間を通じた計画を立て、家庭の教育力をステップアップさせながら展開するのである。



図8 家庭の教育力をステップアップさせる子育て支援セミナー展開例

例えば、1回目の学級懇談会では、教師の演じるロールプレイを通して、保護者が子育てにおける気づきをつかむ場とする。さらに、保護者同士が、情報交換を通して、友好関係が築かれる。2回目の学年懇談会は、家庭の教育力がステップアップしたことに基づいて、保護者の新たな願い(課題)に沿ってプログラムを企画する。又、信頼関係の輪を学年全体に広げるこ

ともねらいとする。主となって企画する教師は、学年経営のコーディネーター役を果たす必要がある。他の教師は、一緒に参加することを通して、より信頼関係が深まる。3回目の親子行事では、親子が話し合いを通して共有課題を解決する楽しい場を提供する。このような活動を通して、保護者が子どもとのかかわり方を見直し、親子の絆が深められる。

以上の例は、館林十小で実施した年間3回の実践を参考にして考えた。この例のように、年間を通して継続的に計画した子育て支援セミナーを通して、家庭の教育力をステップアップさせることを提案する。セミナーを繰り返し実施することの意義は、保護者の家庭における教育力の向上が段階的に期待できることである。したがって、保護者の実態の変容に合わせて、プログラムの質を変えていくことが重要となる。そのような質的な向上が重要であり、それをねらってセミナーを企画していくべきであると考えられる。

3 プログラムを活用して、目的に合わせて企画する

保護者参加型の子育て支援セミナーは、学級懇談会や学年懇談会だけではない。子どもへのかかわり方を学ぶ場として、校内研修で実施することも考えられる。このような校内研修の企画や実施を通して、職員間の相互コミュニケーションも学ぶことができる。

尚、PTAセミナーとして実施する場合は、総合教育センター教育相談グループが企画し、職員が保護者と共に参加すれば、教師が保護者の気持ちを体験的に理解できる。

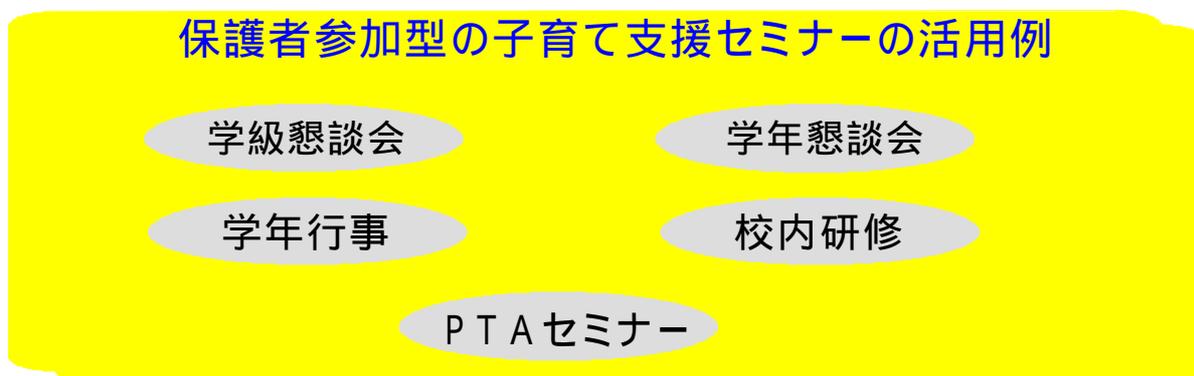


図9 子育て支援セミナー活用例

実践への提言

1 提言 不登校予防のための教師と保護者のシステムづくりには、教師が問題解決思考を学ぶ子育て支援セミナーが有効である

- 子育て支援セミナーで、教師が変わり、親が変わり、子どもが変わる -

2 親子がかかわることで機能する

「家庭の教育力は、親子がかかわり合うことで向上できるものである」という考えに立って、教師が家庭の教育力を高める支援をしていくことは可能だと考える。教師が保護者に対して子育てのあり方の理想を押しついたり、指導したり、非難したりするのではない。家庭を一つの組織（システム）と考え、システムがもともと持っている力を機能させることができれば、家庭の教育力が向上し、子どもの問題行動の表出が減少するのではないかと考える。

家庭の教育力は、親が子どもとかわる中で、自然と育っていくものである。子育て支援セミナーを、家庭の教育力を高めるための、きっかけ作りの場とし、セミナーで学んだことを生

かして、保護者が子どもとのかかわり方のプランを立てる。プランをもとに、保護者が子どもとのかかわることで、親子の相互コミュニケーションが活性化する。



図10 かかわることで気づく

3 教師と保護者のシステムをつくる

家庭を一つのシステムと捉えるのと同じで、子育て支援セミナーも一つのシステムと捉え、保護者と教師がかかわり、子育てという共有課題の解決に取り組む。

さらに、子どもが大きな問題行動を起こしてから対処するような対症療法ではなく、将来子どもが直面するであろう課題に備えて、必要な準備をしておくことが必要である。そのようなシステムの構築のために、保護者と教師をつなぐのである。つまり、子育て支援セミナーで保護者と教師がつながり、不登校予防のシステムを機能させる。

子育て支援セミナーを行い、参加者した保護者から、「又、このような子育てセミナーをもってもらいたい。」「参加者全員が心からうちとけられる雰囲気づくりをしていただいた上での様々な投げかけに、楽しく、真剣に考えることができました。」といった言葉をいただいた。保護者に感謝され、保護者と教師をつなぐシステム作りの第一歩となった。

教師は、セミナーを企画すること（プログラム作り）を通して、課題解決の思考過程〔ピアサポートモデル（小林 2002）〕を学び、問題解決能力が高まる。セミナーの実践場面では、保護者と共に学び合い、分かり合う関係を築くことで、教師と保護者が信頼関係でつながる。

保護者は、セミナーに参加することで、子どもの気持ちに立った対応の仕方を体験や事例を通して学ぶ。学んだことを生かして、子どもとのかかわり方のプランを立て、子どもとのかかわる。子どもが、「わかってくれた」と感じることで、親子の間に相互コミュニケーションが成立する。子どもとのかかわりながら、子どもへの支援の仕方を考える思考過程を繰り返すことで、家庭の教育力が向上する。

子どもは、「わかってくれた」と思える温かい家庭（愛情）で守られることで、情緒が安定し、困難に立ち向かったり、直面する課題を解決したりする力を身につける。又、学校で、友達や教師など人とかかわることが好きになる。

以上のような、子育て支援セミナーを中心としたシステム作りによって、教師、保護者、子どもそれぞれの力が向上し、不登校予防につながる。つまり、子育て支援セミナーを通して、不登校を予防する、教師と保護者のシステムが確立されると考える。

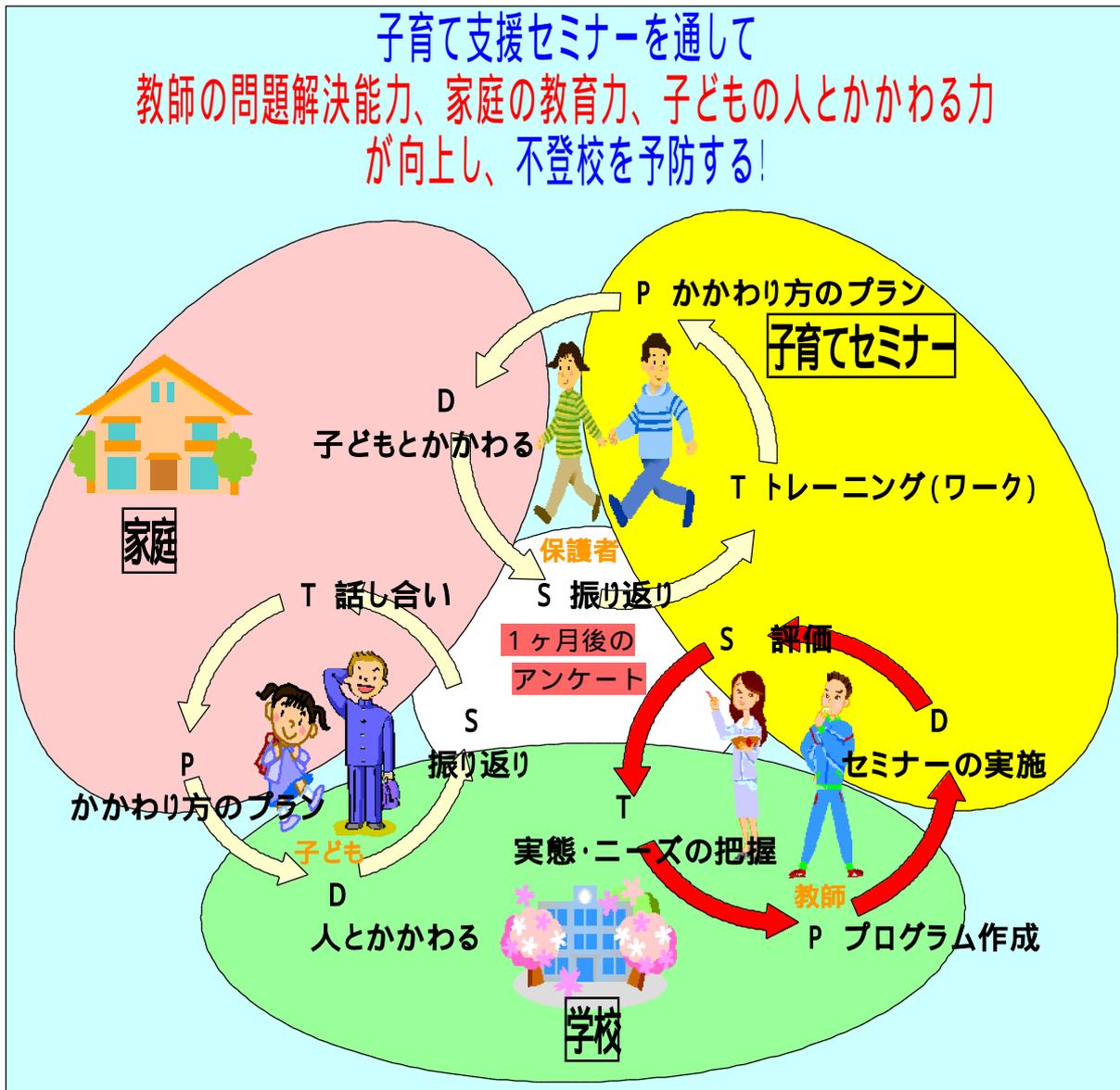


図11 セミナーを通して不登校を予防する教師と保護者のシステム

4 子育て支援セミナーをきっかけに、温かい風土が地域に広がる

「子育て支援セミナー」を通して、保護者の**問題解決思考**と**相互コミュニケーション能力**が向上し、温かい家庭の風土が培われる。温かい家庭に支えられた子どもが集まる学校は、温かい風土に変わる。

教師も、子育て支援セミナーを通して、**問題解決思考**と**相互コミュニケーション能力**が向上し、温かい学校風土が培われる。

つまり、温かい風土が、「家庭」「学校」「地域」と波及し、地域全体が温かい風土になる。

又、子育て支援セミナーでの保護者の情報交換をきっかけに、地域での保護者同士の情報交換がよりスムーズに行われるようになる。

つまり、子育て支援セミナーが核となり、家庭と家庭が結ばれ、地域が活性化され、温かい地域の風土が築かれる。

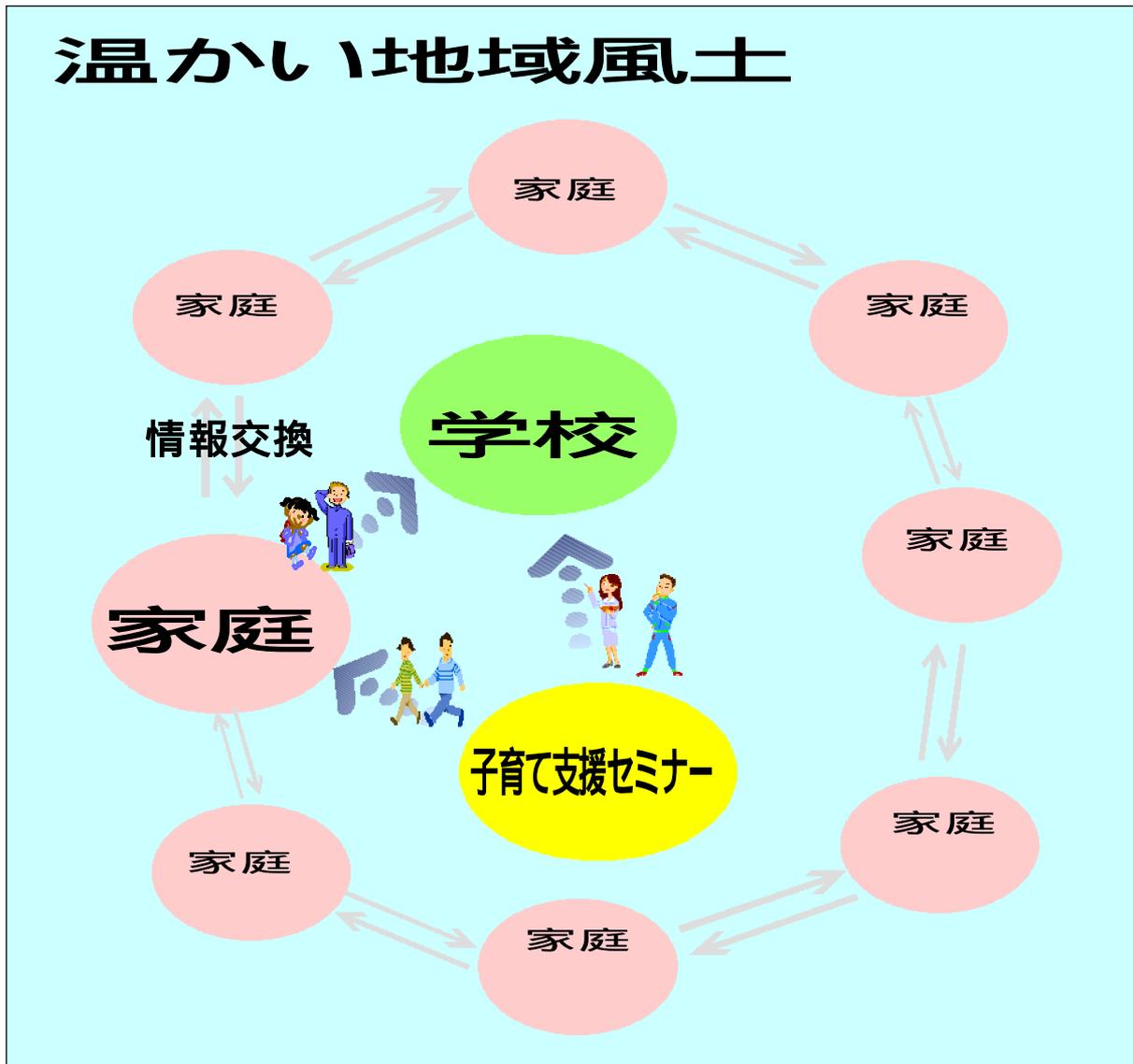


図12 温かい風土が地域に広がる

今後の課題

1 子育て支援セミナー作成の手引きの修正

作成したプログラム作成の手引きは、アンケート結果によっては、セミナーのテーマを導きづらかった。どのようなアンケート結果にも対応した手引きになるように、修正を加える必要がある。

又、様々な発達段階に対応したプログラム例を作成し、提案することによって、学級担任を支援していくことも必要である。

2 学級担任の企画による子育て支援セミナーの実践

作成した手引きを利用して、実際に教師が、子育て支援セミナーを開催することができた。「プログラム作成の手引き」があることを広め、子育て支援プログラムを活用したセミナーを県内で幅広く実践することが課題である。

3 教師自身が学ぶ不登校予防

子育て支援プログラムを、校内研修の場で活用することも有意義であると考え。教師が、子どもの気持ちに立った対応の仕方を学ぶことができれば、さらに不登校が予防できると考える。したがって、子育て支援セミナーを教師対象に企画することが課題である。

4 教師と保護者のシステム

子育て支援プログラムは、不登校予防の機能をもつ。しかし、不登校予防だけでなく、子どもの問題行動、全ての予防にも役立つと考える。つまり、教師と保護者の不登校予防システムは、問題行動予防システムと言いかえることができる。したがって、そういった観点からも、子育て支援プログラムを広め、活用していくことが有効であり、課題である。

参考文献・引用文献

- ・『SSNスクーリングサポートネットワーク 不登校問題 課題解決支援資料』
群馬県総合教育センター (2004)
- ・奥山 隆・懸川 武史 著 『適応指導教室をフィールドとした学校復帰モデルの試作 - フィールドワークを通じた不登校支援の質的研究 - 』
群馬県総合教育センター 長期研修員 研究報告書211集 (2004)
- ・小林 澄子 著 『ピア・サポート・プログラムの総合的な学習の時間への位置づけと導入モデルの構築 - 生徒の対人関係能力の向上を目指して - 』
群馬県総合教育センター 長期研修員 研究報告書205集 (2002)
- ・横澤 敏朗 著 『ピア・サポートにおける教師と生徒の関係性に関する質的研究 - トレーニング場面のプロトコル分析を通して - 』
群馬県総合教育センター 長期研修員 研究報告書205集 (2002)
- ・田野入 康裕/酒庭 寛子 著 『生徒との相互コミュニケーションの改善に役立つ研修プログラムの試作 - 教師の自己理解を目指した体験学習を取り入れて - 』
群馬県総合教育センター 長期研修員 研究報告書193集 (1999)
- ・トレバー コール 著 『ピア・サポート実践マニュアル Kids Helping Kids 』
川島書店 (2002)
- ・山本 銀二 著 『エンカウタによる "心の教育" ふれあいのエクササイズを創る』
東海大学出版会 (2001)
- ・亀口 憲治 著 『家族力の根拠』 ナカニシヤ出版 (2004)
- ・渡辺 三枝子 著 『新版カウンセリング心理学』 ナカニシヤ出版 (2003)
- ・袈岩 奈々 著 『感じない子どもこころを扱えない大人』 集英社新書 (2001)
- ・渡辺 康麿 著 『小学生にわかっているけどイライラするお母さんへ』 学陽書房 (1999)
- ・小倉 清 著 『子どものこころ その成り立ちをたどる』 慶応義塾大学出版会 (1996)
- ・無藤 隆/高橋 恵子/田島 信元 編 『発達心理学入門 乳児・幼児・児童』
東京大学出版会 (1993)
- ・箕浦 康子 著 『マイクロ・エスノグラフィー入門 フィールドワークの技法と実際』
ミネルヴァ書房 (1999)
- ・皆川 興栄 著 『ライフスキル・ワークショップ エクササイズ14』
明治図書 (2002)
- ・国立教育政策研究所生徒指導研究センター 『生徒指導資料第2集 生徒指導への対応と学校の取組について - 小学校・中学校編 - 』
ぎょうせい (2004)
- ・石戸 教嗣 著 『ルーマンの教育システム論』
恒星厚生閣 (2000)